

第 I 章 地域の概要と関連諸条件

1 地域の概要

1) 宗像市の概要

宗像市は福岡県の北部、福岡市と北九州市のほぼ中間に位置する人口 9 万 5 千人ほどの学術・文化都市である。北は玄界灘に臨み、大島、地島、沖ノ島、勝島の四島を擁し、東は遠賀郡と鞍手郡、南は宮若市、西は福津市に接する。北を除く 3 方を低山地に囲まれ、市の水源である釣川によって肥沃な沖積低地を形成されたこの地は、古くから交通や文化交流の要衝であったため、多くの歴史を有しつつ、同時に多くの自然も残している。海の正倉院と称される沖ノ島、県下最大の島である筑前大島、旧唐津街道沿いに発達した宿場町、赤間宿や原町、また北の海岸線一帯は玄海国定公園に含まれる景勝地、さつき松原など、多くの歴史文化や自然に恵まれている。

市内の交通は市内中央部を東西に JR 鹿児島本線が横断し、東郷駅、赤間駅、教育大前駅の 3 駅を持つ。その南部を国道 3 号線が、北部には国道 495 号線が市域を横断しており利便性が高い。

また、本市は福岡教育大学など 3 つの大学を有する学園都市であり、福岡市や北九州市への通勤圏としての住宅都市であるとともに、神湊、大島、鐘崎など 4 漁港を有する漁業のまちとしての要素を有するなど、バラエティに富む地域の特色を活かした市民参画、協働によるまちづくりを進めている。

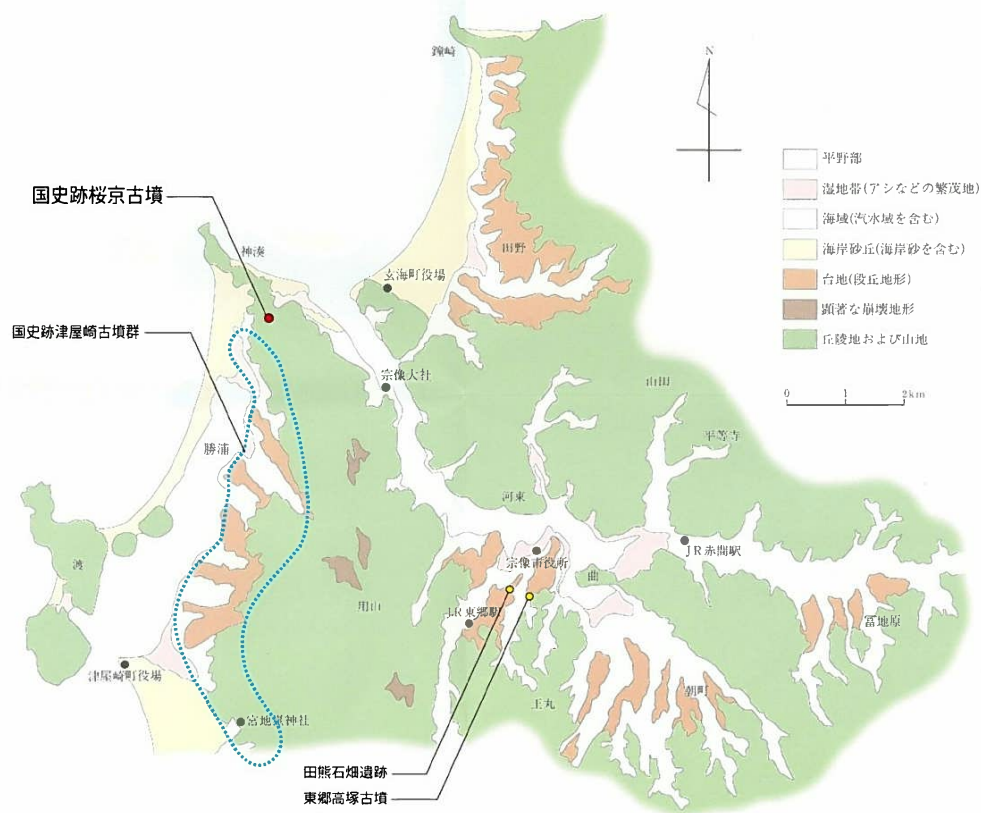


(図 1-1-1、宗像市の位置図) 出典；宗像市ホームページ

2) 宗像市の歴史概要

宗像地域における人の生活の起源は、約3万年前から1万年前の後期旧石器時代とされている。池浦トボシ遺跡や平等寺長浦遺跡、牟田池遺跡などでナイフ形石器や台形石器が発見されている。多くの石器が発見される牟田池遺跡は、季節的な狩猟場であったと推定されている。

縄文時代に入ると、氷河期の終焉とともに海面が上昇したため、海が釣川に沿って内陸部まで入り込んだとされる。『宗像市史』編纂時にボーリング調査を行い、縄文時代前期(4700年前)の海岸線が推定された。釣川流域は宗像入海であり、その周辺の平野地が居住地として活用されていたとされ、釣川中流域から下流域での縄文時代の遺構は発見されていない。



(図 1-1-2、4700 年前の宗像市) 出典：『宗像市史』通史編第1巻付録

この時代の遺構としては、近年、さつき松原遺跡が海岸部で発見され、壱式土器（縄文時代前期前半）や曾畑式土器（縄文時代前期後半）が出土し、5000～6000 年前の遺構と推定されている。

沖ノ島でも、国家的祭祀の始まる古墳時代から遥かにさかのぼる縄文時代前期から断続的に遺物が出土している。早くから海上交通の拠り所であったことが窺える。同時期の出土品からも、長きにわたり玄界灘を自在に航海した、のちの宗像海人族の胎動期と捉えられる。

縄文時代後期の遺跡としては鐘崎貝塚が著名である。昭和8年頃から貝塚として認識され、海水産・淡水産の貝類、魚骨、獣骨などが出土し、海や山に生きる縄文人の暮らしぶりを窺い知ることができる。さつき海岸遺跡の発見からも、この時代の遺跡は潟周辺や玄界灘沿岸の砂丘下に発見される可能性が高いと推測されている。

弥生時代には気候の変化とともに海が後退し、釣川によって宗像平野が形成された。また同時期に稲作技術が伝来し、釣川中流の丘陵や河成段丘上に集落が形成されることとなる。前期初頭の東郷登り立遺跡においては環濠集落の成立がみられ、田久松ヶ浦遺跡では、朝鮮半島に起源を有する石槨墓が確認され、朝鮮半島との密接な交流が推察される。弥生時代中期に営まれた田熊石畑遺跡では、中期前半の墓域から15点にも及ぶ武器形青銅器が出土したことで、中期前半段階には北部九州屈指の有力者集団が宗像地域に成立していたことが明らかになった。



(写真 I-1、田熊石畑遺跡高床倉庫群)

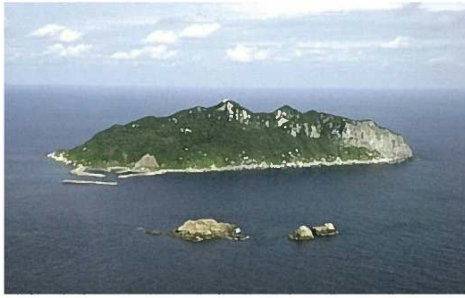


(写真 I-2、田熊石畑遺跡出土武器形青銅器)

古墳時代は、弥生時代の地勢圏を踏襲した胸形君がヤマト王権と結び付き、大きく成長する時期である。4世紀後半から沖ノ島では国家的祭祀が始まったとされ、優れた航海技術を持つ宗像海人族たちを束ねていた胸形君は、その国家的祭祀に深くかかわることとなる。4世紀後半頃に築造された東郷高塚古墳は初期の沖ノ島祭祀に関わった宗像地域の首長墓と目されている。列島では朝鮮半島から新しい技術の導入がされ、鉄器生産や須恵器生産が始まっている。宗像でも5世紀中頃の野坂一町間遺跡からは鍛冶炉が確認され、朝町山ノ口遺跡など6世紀代の古墳群からは鉄槌・鉄鉗など鍛冶道具が出土するなど、鉄器製作工人集団の存在が窺える。須恵器生産は、5世紀から6世紀前半頃に始まり、須恵須賀浦遺跡などで40数基が調査され、「宗像窯跡群」と称される。

5世紀から7世紀にかけての胸形君一族の首長墓は、福津市沿岸部に広がる国史跡津屋崎古墳群である。

国史跡桜京古墳はこの時代、6世紀後半に築かれたもので、筑後・肥後地方に多く分布する装飾古墳の一つである。分布の中心から外れた玄界灘沿岸部に位置し、宗像海人族と有明海沿岸地域との関わりを見る上で重要な古墳である。



(写真 I-3、沖ノ島)



(写真 I-4、桜京古墳裝飾壁画)

律令制下の宗像には、駅路、西海道大宰府路が通り、釣川流域など広範囲にわたり条里の痕跡が認められる。また、宗像郡は宗像神社の神域とされ、古くから天皇家と強いつながりを持ち、九州唯一の神郡として様々な特権を与えられていた。宗像氏は郡司と宗像神社の神主を兼任し行政権や祭祀権を一手に握り、強力に地域支配を行っていたと考えられる。

中世には東アジアの交通・交易と密接に関係し、宗像大宮司家の進める日宋貿易が盛んに行われた。戦国時代末期には宗像氏貞が領土を良く守ったが、嫡子がなく宗像家は断絶することとなる。

近世には赤間宿、原町を通る唐津街道が古代官道に代わり幹線道路となった。特に赤間宿は芦屋と木屋瀬へ向かう街道の分岐点として栄えた。また、釣川流域はその河口付近の屈曲により、たびたび氾濫を起こしていたことから、黒田藩の治水事業として寛政3年(1791)に河口の開削工事が行われ、ほぼ現在の地形が形成された。

その後は農村・漁村としての性格が強い時期が続くが、明治23年(1890)には鉄道が開通し、同年には赤間駅、大正2年(1913)には東郷駅が開業した。昭和36年(1961)、鹿児島本線の電化とともに福岡・北九州両市への通勤圏として注目され、昭和39年(1964)に自由ヶ丘団地、昭和41年(1966)に日の里団地などの大規模な住宅開発が始まった。一方で、東海大学福岡校(現東海大学福岡短期大学)の開校、福岡教育大学統合完了、日本赤十字国際看護大学開校など学園都市の基盤が整った。

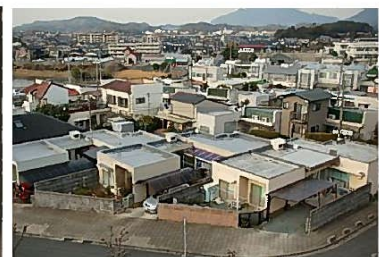
近年では平成15年(2003)4月1日に旧玄海町と、次いで平成17年(2005)3月28日には旧大島村と合併し、新しい宗像市が誕生した。自然、歴史、文化に特色と多様性のある都市として市域、人口ともに拡大を続け今日に至る。



(写真 I-5、宗像大社)



(写真 I-6、赤間宿)

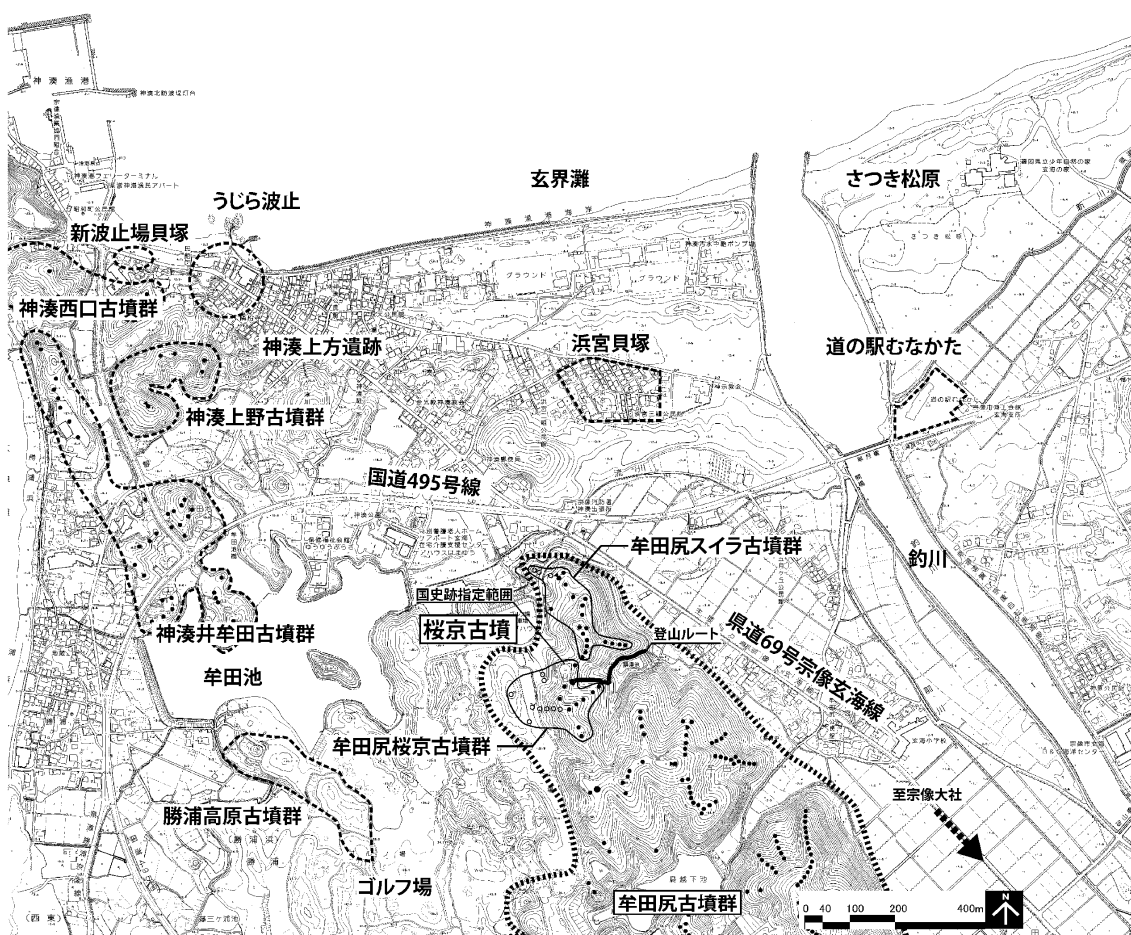


(写真 I-7、日の里団地)

3) 史跡の位置及び周辺状況

国史跡桜京古墳は宗像市の西沿岸部に位置し、釣川河口左岸丘陵上、標高約 50mに立地する装飾古墳(前方後円墳)である。東西 0.9km、南北 1km の範囲に約 200 基の古墳が連なる牟田尻古墳群の一支群、牟田尻桜京古墳群に含まれる。現在は、発見当時の墳丘部分の面積、893 m²が公有地化され、国史跡として保存されている。また、世界遺産暫定リストに記載される「宗像・沖ノ島と関連遺産群」の構成資産でもある。周辺には桜京古墳のほか牟田尻桜京古墳群を構成する円墳 13 基、その北側には牟田尻スイラ古墳群を構成する円墳 17 基と前方後円墳 1 基が存在する。

桜京古墳は丘陵稜線上に築造されており、西方は神湊から南西方向にかけての玄界灘とそこに浮かぶ島々を、東方は釣川の流れる平野部の眺望を望む絶好の位置にある。



(図 1-1-3、史跡の位置と周辺状況)

桜京古墳の西側一帯は、ゴルフ場として開発された際、牟田尻古墳群の一部は発掘調査後消滅したが、大半はゴルフ場の緑地緩衝帯として保存されている。

古墳の東側を通る県道 69 号線宗像玄海線を 0.5km ほど南下すると宗像市立玄海小学校がある。今後 0.6km ほど西側にある玄海中学校への移転が計画されているが、史跡に最も近い小中学校として利活用の主体となるよう整備計画を進める必要がある。

さらに、小学校から 1km ほど県道を南下すると、宗像三女神のひとり市杵島姫を祀る宗像大社辺津宮に至り、隣接する敷地には宗像市の歴史拠点となる郷土文化学習交流館の整備が進められている。

桜京古墳の北側を通る国道 495 号線は、玄界灘を垣間見るさつき松原沿いの道路で、風光明媚な観光ルートとしても利用されている。近年観光拠点として釣川岸に整備された「道の駅むなかた」は観光客で賑わっており、観光拠点との相乗効果が期待されている。

2 関連諸条件

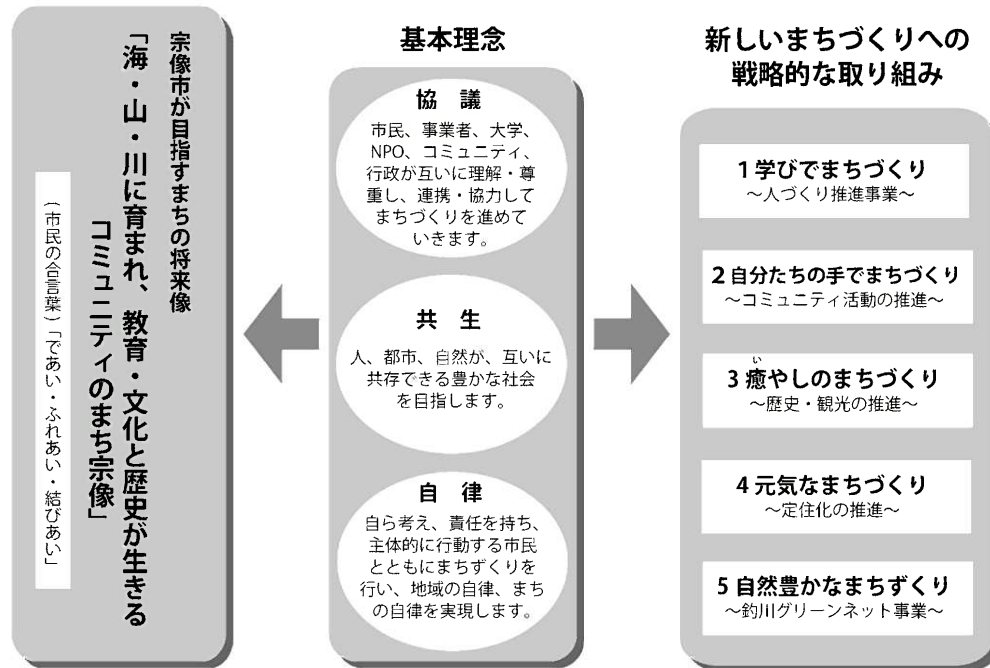
1) 関連計画の中での史跡整備の位置付け

国史跡である桜京古墳の整備においては、文化財保護法における保護の理念を前提とし「第1次宗像市総合計画」及び以下諸関連計画の目的を理解し、協調した計画策定が必要である。

宗像市における歴史・文化遺産の位置付けは大きく、地域戦略や人づくり、コミュニティのあり方と共に以下の計画の中で数多く扱われている。また本計画は周辺の森林保全や管理運営、活用整備などに関する自然との共生、観光の振興、高齢社会への対応、協働による運営などの概念についても同時に把握していく。

ア) 第一次宗像市総合計画 基本構想（平成17年度～平成26年度）

この計画は、少子・高齢化の進行、長期の景気低迷、地方交付税の削減の見通しなど、厳しい財政状況の中、自立した行政経営、地域経営システムへの移行を急務とし、『協働・共生・自律』という宗像市の経営の考え方となる基本理念を掲げ、将来像や意欲的な取り組みを体系的に整理したものである。目指すべき都市像を『海・山・川に生まれ、教育・文化と歴史が生きるコミュニティのまち宗像』と定め、その実現のために5つの「戦略的な取り組み」を策定している。



(図 1-2-1) 総合計画の構成

その取り組みとして、コミュニティ活動や人づくりの推進、定住化の促進と共に、歴史・観光の推進と釣川グリーンネット事業が挙げられている。特に、歴史・観光の推進は交流人口の増加や地域活性を直接的に期待でき、行政経営に大きく関わるものと捉えられる。

そのため、歴史・文化遺産については、大きく位置付けされており、「豊かな歴史・文化遺産や自然などを生かした観光の振興」を掲げ、学校教育や生涯学習への活用も含めた、新たな観光産業の創出や、資源のネットワーク化、歴史拠点の整備など、具体的な計画がなされている。現在これらの構想は、宗像市歴史・観光推進計画や郷土文化交流学習施設基本構想・基本計画など、具体的計画へと進められている。

経済効果が期待できる自然・文化資産整備を行い、同時に地域に対する誇りの育成、教育活用、人材育成、行政サービスの充実、市民参画、生き甲斐の創出など、高齢社会の質の向上を達成することで、定住化の促進へとつなげる。桜京古墳の整備においては、来場者数の確保と市民活動の活躍の場の創造を念頭に入れた計画が必要とされる。

イ) 第1次宗像市総合計画 後期基本計画（平成22年度～平成26年度）

基本構想では歴史、文化遺産の観光活用について定めるものの、後期基本計画では保存と継承に軸点を置いている。将来像を「歴史・文化遺産を未来へと引き継ぐまち」と据え、課題としては、文化財の発掘調査、保全などに努めること、文化財を広く公開し学ぶ機会を充実させることで、市民の郷土愛や誇りを醸成することを挙げている。また、世界遺産登録活動の推進やPR活動の強化、歴史・文化遺産の利用促進のため、郷土文化学習交流館を準備し、市民のみならず市外からの来訪者が宗像の歴史文化にふれる場として活用するものとしている。

また、関連諸要素としては、都市ブランドの確立とPR（第0部）市民活動の推進（第1部）自然、歴史資源を融合し、観光資源として開発するなどの観光の振興（第3部）、荒廃森林の再生や緑のネットワーク化などの自然との共生（第4部）、あらゆる人々に優しいユニバーサルデザインや障害のある人が意識せずに普通の生活を送れるよう環境を整えるノーマライゼーションを念頭に入れた公共施設整備や高齢者の生き甲斐づくりなど福祉の充実（第5部）が取り組み方針として挙げられている。文化財の継承と共に観光の振興、荒廃森林の再生、高齢社会対応など、都市ブランドの確立のために総合的な見地に立った計画となっている。

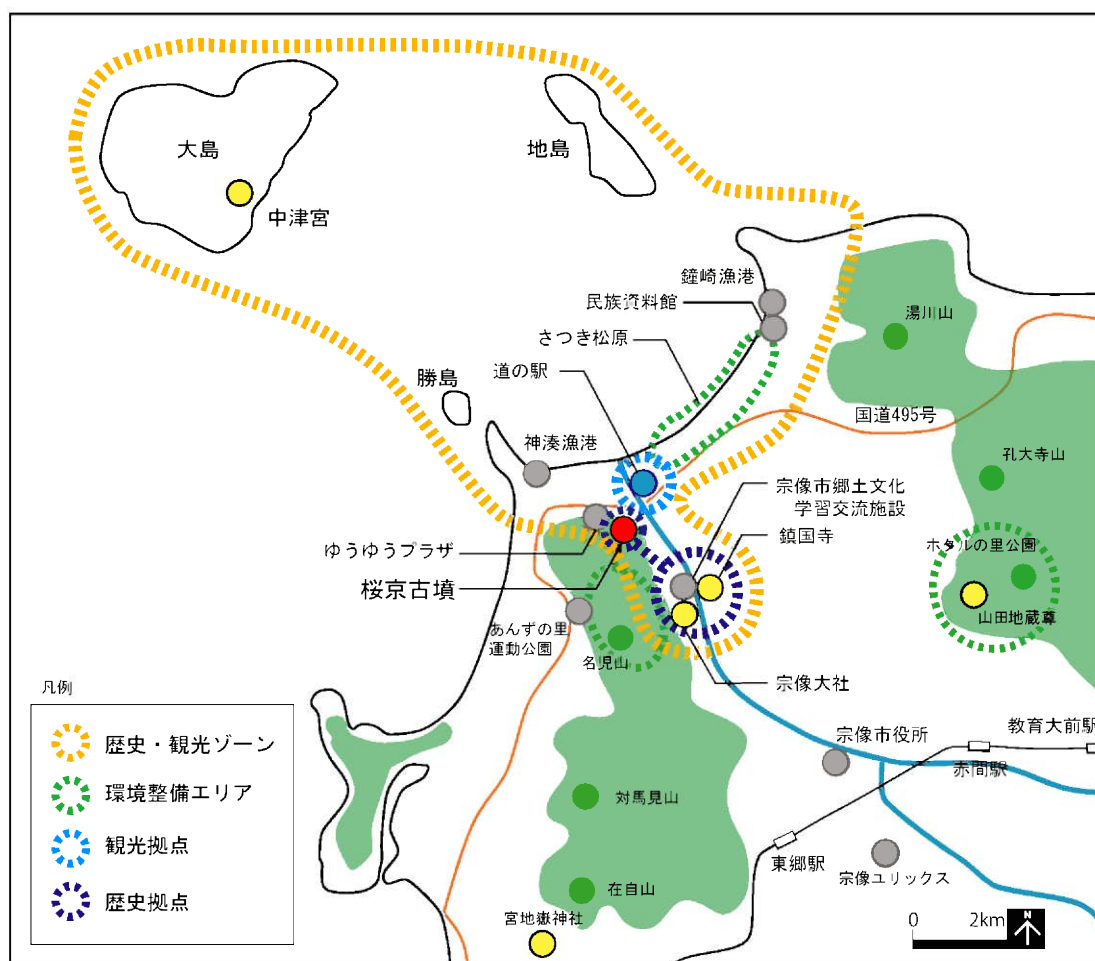
ウ) 宗像市歴史・観光推進計画（平成 17 年 3 月）

ここでは「食べる」「見る」から来訪者や市民が「感じ」「考える」ような知的情報を付加価値とした観光地づくりを進め、文化拠点、観光拠点の設定を行い、新たな観光産業の創出のための取り組みについて具体的に計画されている。

運営面においても、市民との協働によることを目指し、ボランティアガイドの育成など人づくりの面や、知的情報の魅力化と活用方法、観光ルート、企画開発など多岐にわたる具体的計画がなされている。

そのなかで、重点的に取り組むものを「重点プロジェクト」として抽出し、4つの課題を挙げている。この重点課題の一つに、「歴史体験拠点施設づくり」が存在する。

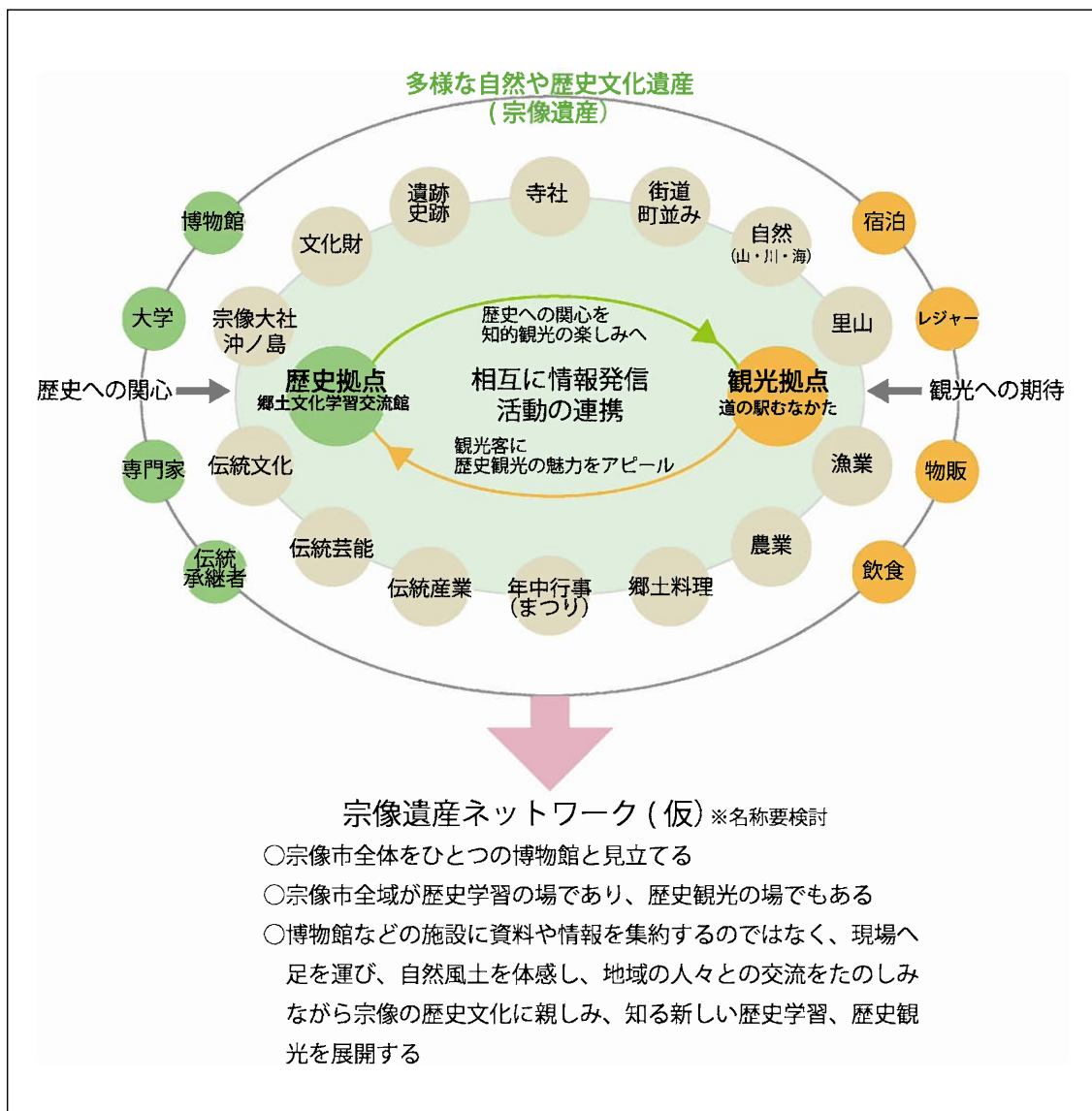
桜京古墳の位置付けは歴史体験拠点の一つであり、フィールドワークの場として規定されている。またその立地は観光・リクリエーションゾーンに含まれるため歴史、観光双方の視点からの考察を必要とし、十分に活用されることを見据えた整備が求められる。



(図 I-2-2) 宗像市歴史・観光計画の構想

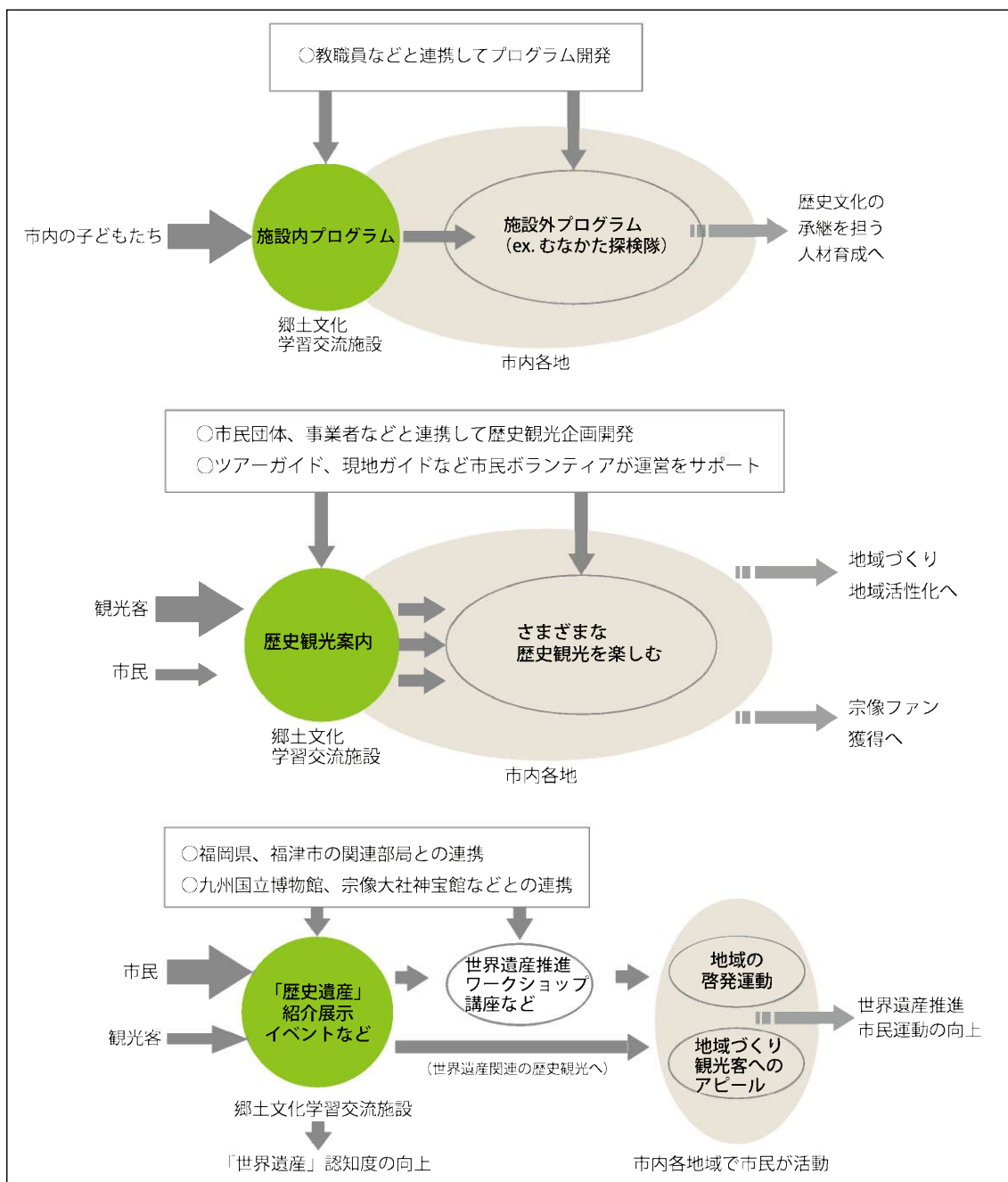
エ) 郷土文化学習交流施設 基本構想・基本計画

宗像市歴史・観光推進計画のなかで重点課題の一つ、「歴史観光拠点施設づくり」に対応した計画である。ここでは第1次宗像市総合計画、基本構想の「癒しのまちづくり」の実現のため、「歴史文化の継承」と「歴史観光の推進」の融合を方針に掲げ、宗像遺産のネットワーク化を図り、相互に結び付けることでさまざまな歴史文化遺産を確実に保存・継承するとともに、その活用をとおして地域の活性化を実現するための具体的計画がなされている。



(図 1-2-3、宗像遺産ネットワークの概念図)

フィールドミュージアム、やカルチュラルツーリズムといった概念のコア施設としての役割を果たすこととなるこの施設の計画には、「市民との協働」の理念に基づき、市域全体の自然や歴史文化、いわゆる宗像遺産を結び、活用する為の様々な市民参加による運営企画がプログラムがされ、同時に観光客へのホスピタリティに関して、情報、サービス、インフラなどについて検討されている。さらに、館のオープンに先立ち、宗像の歴史・自然・観光などに関心のある市民を募集し、館の展示や展示解説、歴史観光ツアーガイドなどを担う「地域学芸員」の養成を行っている。桜京古墳は、世界遺産関連遺産のひとつとして、この歴史拠点施設と連携した活用展開が望まれよう。



(図 I-2-4、運営のイメージ)

オ) 宗像市環境基本計画

目指す環境像を「自然と歴史のふるさと 住みたいまち 宗像」に据えるこの計画においては、目標達成に向けた方向性の一つとして、「地域資源の保全と活用」を挙げ、個別施策の一つに「歴史・文化資源の保全と環境保全の一体的推進」を掲げている。コミュニティの醸成と環境保全活動を活性化することで推進するとしている。

また、法に基づく自然環境の保全をあげ、国土利用計画法や都市計画法、農業振興地域の整備に関する法律などの土地利用関連法に指定された地域の保全を図り、自然環境の保全及び優れた自然景観の向上に努めるとしている。

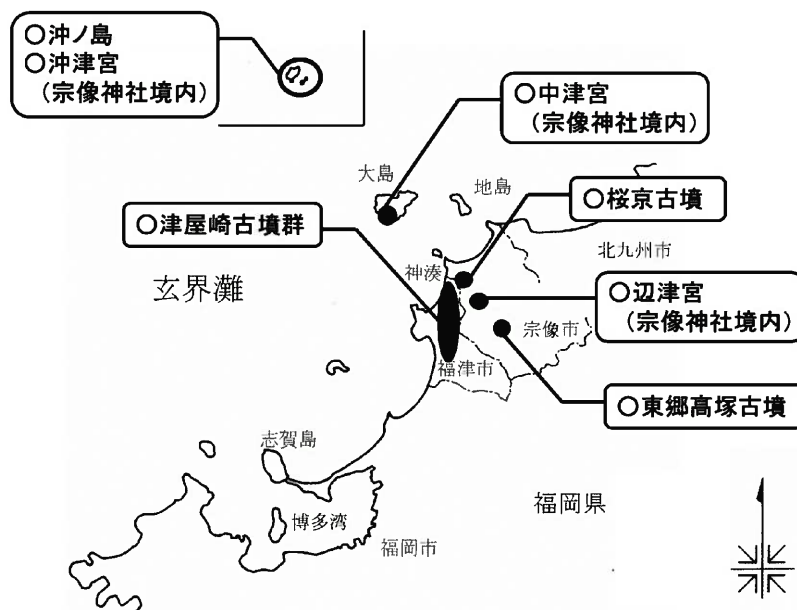
桜京古墳の整備計画においても自然林の保護、二次林の再生など自然環境の保全に対しては、史跡の保護と一体的に推進が可能な計画が求められる。

2) 世界遺産登録活動との連携

ア) 構成資産の概要

「宗像・沖ノ島と関連遺産群」は4世紀後半から10世紀にかけて国家的祭祀が行われた沖ノ島と、祭祀に深く関わった古代有力氏族、宗像氏に関連する遺跡群から成り、今でもその信仰や禁忌が継続されている貴重な資産である。構成資産には、東アジア最大級の祭祀遺跡である沖ノ島をはじめ宗像神社境内、津屋崎古墳群、今回整備計画を策定する桜京古墳と東郷高塚古墳の5つがある。桜京古墳は、装飾や石室構造から有明海沿岸部地域との関りを見る上で重要とされている。

平成21年(2009年)1月5日にユネスコの世界遺産暫定リストに記載されるとともに、世界遺産登録推進市民の会が結成され、世界遺産登録へ気運が高まっている。



(図 I-2-5、宗像遺産ネットワークの概念)

イ) 国史跡津屋崎古墳群との連携

国史跡津屋崎古墳群は、桜京古墳と同様に宗像氏に関わる遺跡として世界遺産暫定リストに記載されている。南北 8km、東西 2km の範囲に、5 世紀から 7 世紀にかけて総数約 60 基の古墳が築造されており、その規模から沖ノ島祭祀を支えた宗像氏一族の歴代首長墓と考えられている。福津市では津屋崎古墳群の国史跡指定を機に整備計画が進められ、平成 22 年度に『国指定史跡津屋崎古墳群整備基本計画』が策定された。海と関わりの深い豪族が造り葬られた古墳群として、眺望を整備するとともに、古墳及びその周辺を「まるごと公開遺跡（仮称）」と位置付けた整備方針が示されている。

桜京古墳の西方約 0.7km に位置する勝浦高原古墳群は、桜京古墳を含む牟田尻古墳群と同様に海の民としての性格を有していると考えられる。また、西南約 1km には 100m 近い前方後円墳である勝浦峯ノ畑古墳や勝浦井ノ浦古墳が位置するなど 5 世紀中頃に築造された宗像氏の首長墓も近い。津屋崎古墳群は宗像氏一族の歴代首長の墳墓群であり、桜京古墳は宗像氏に従う海人族のリーダーの墳墓とも言え、地方豪族による宗像地域の支配構造を知る上でも重要である。今後とも整備状況を踏まえ、これら古墳群間を縫うように走る国道 495 号線を根幹にした公開活用事業を企画するなど、一層の連携を進める必要がある。